

東浦町と合わせて  
10時に提供

# 半田市 蔵出し情報 報道機関提供資料

問い合わせ

新美南吉記念館  
館長 榊原一人  
0569-26-4888

平成30年12月25日提供 (事前情報・事後情報)

名称	「 <sup>くめつねたみ</sup> 久米常民宛新美南吉書簡」 寄託調印式
期間	平成31年1月10日(木) 10時~10時30分
場所	新美南吉記念館図書室(半田市岩滑西町1-10-1)
趣旨 (目的)	平成25年に発見された新美南吉が中学時代の親友、久米常民に宛てた書簡6通について、貴重な資料の劣化を防ぎ、長期間に亘って良好な状態で保存するため、所有者の東浦町から新美南吉記念館(半田市)に寄託されることになりました。 両市町がそれぞれの郷土の偉人を顕彰していく姿勢をPRするため、寄託に関する覚書の調印式を新美南吉記念館で行います
内容	○半田市と東浦町の両教育長が出席し、寄託に関する覚書に調印します。 ○その他、両教育長の挨拶、書簡の朗読(南吉童話お話の会でんでんむし)、新美南吉記念館学芸員による解説などを行います。 ○久米常民子息の清之 <sup>きよゆき</sup> 氏も出席予定です。 ○どなたでも調印式の様子をご覧いただけます。来場者には、東浦町から冊子『南吉さんから常民さんへ~六通の手紙~』(オールカラー・45頁・非売品)を差し上げます。 ○一部の書簡は、新美南吉記念館で開催する半田高校創立100周年記念企画展「南吉の中学生日記」(~2/17)で展示しています。 ○新美南吉記念館は、現在、空調設備更新及び照明LED化工事のため臨時休館中です(~12/21)。この工事により収蔵庫や展示室の環境も向上するので、寄託される書簡をこれまで以上に良い状態で保管することができます。
担当者 情熱メッセージ	半田市としては、平成26年に「新美南吉ゆかりの地交流協定」を結んだ安城市に次いで、2例目となる関係自治体との協力関係です。新美南吉にゆかりのある自治体のネットワークが広がっていくことを願っています。
別添資料	別紙 及び 東浦町教育委員会が発行した上記冊子
写真	事前・事後提供可
広報担当への 連絡事項	・新美南吉、久米常民、書簡などの写真を提供できます。 ・久米 清之(くめ きよゆき)氏(東浦町在住) ・半田市教育長 鈴木 慶光(すずかわ よしみつ) ・東浦町教育長 恒川 渉(つねかわ わたる)

半田市企画課広報情報担当  
0569-84-0603



### ○久米常民（くめ つねたみ）

大正2年5月、現在の知多郡東浦町藤江に生まれる。旧制半田中学校で新美南吉と同級生となり、共に文学を志す仲間として親交を深める。勉学においても良きライバルで、昭和6年の中学卒業時、常民が首席、南吉が次席だった。第八高等学校から東京帝国大学に進み、同郷の久松潜一を師と仰いで万葉集の研究に励む。戦後は高等学校や大学で教鞭を執りながら万葉集に関する論文を精力的に発表し、文学博士の学位を受ける。愛知県立大学教授。昭和52年2月に63歳で永眠。

### ○調印式で朗読する書簡（昭和6年4月25日）の一節

君は長い間手紙をくれなかったね。何故くれなかったんだ？

僕は今恨んでる。本当に。君は僕の方から先に手紙は出せないということ、僕がそういうまげらしいの人間であるということをしていて、何故、手紙をくれなかったんだ？

（略）

「君の幸福を祈りつつ」ああ僕は一月前の手紙には、こんなことをよく書いたんだな。けれど、僕は決して、他人の幸福なんか祈らなかったはずだ。「僕の幸福を祈りつつ」であったのだ。

しかし、思えば「話の出来る奴」は君一人だったな。そして君と僕は、「そんな話」以外に何か結びつけるものがあつたな。思えばそうだったな。僕は涙もろくなっている。今君が俺の前に来たら、君をにらんで泣くぞ。泣くぞ。

（略）

八高の制帽制服で来い。来たら、覚えたドイツ語をかたれ。俺は、思いきって、たたきのめされて、泣いて見せるから。

※この手紙を書いた当時の新美南吉は、経済的事情から第八高等学校進学を断念し岡崎師範学校を受験したものの体格検査で落とされ、郷里の半田第二尋常小学校（現・半田市立岩滑小学校）で代用教員をしていました。それに対し、中学校で南吉と成績を争った久米常民は第八高等学校に進学していました。手紙を読んで驚いた常民は、何とか南吉の気持ちを静めようと自転車を走らせ、南吉の家を訪ねました。ところが会ってみると意外にも南吉はケロッとしており、いつもと変わりありませんでした。後に常民は、この手紙が南吉の「詩」であると感じました。南吉は自分に怒りをぶつけたのではなく、彼の中の湧き上がる気持ちを書簡体の詩に表現したのだと考えたのです。

※式典ではこの書簡の全文を朗読します。